

## 「ぶっとびファンド」－振り返り座談会

「ぶっとびファンド」は、アートサポートふくおか独自の文化芸術活動応援する助成制度です。代表の古賀弥生が「現行のさまざまな助成金・補助金の制度に物申したい気持ちが募り、不満があるなら文句をいうより自分で納得のいく制度をつくってしまおう」と考えたことをきっかけに、2019年に発足しました。

当時、古賀はぶっとびファンドについてこのように綴っています。

久しぶりに自分で行政系補助金申請書をいくつか書いて、以前と変わらずめんどくさかったわけです。これから始めようとしていることなのに、成果や継続性について明確に書かなければいけなかったり、作文のうまい下手で採択されるかどうかが決まるのか！？と思ったりして。活動する者として「応援されている」感覚は得られませんでした。また、過去の経験では、実施後に報告しても、行なった事業の内容について「がんばったね」とは言ってもらえず、決算書類の細かい金額に関する問い合わせしか来たことはありません。まあ、いろいろ言い出すとキリがないのですが、もうちょっとなんとかならないのか…と思ったとき、不満があるなら文句をいうより自分で納得のいく制度をつくってしまおう、と考えたわけです。それで「ぶっとびファンド」が生まれました。

ぶっとびファンドの最大の特徴は、応募の際に申請書のようなペーパーが一切いらないことです。応募の意思表示を伝えたのち（1次審査）、プレゼンテーションでその熱意を伝えてもらい（2次審査）、そこで4人の審査員たちが心を動かされたら10万円を支援する、いわば投げ銭的ともいえる助成制度です。支援金は欲しい時期に入金し（前払い可）、実施済みでも応募が可能、また結果的に実施できなくても支援金はお渡しします。さらに、助成事業は報告会で報告してもらうものの、「報告書」「領収書」を提出してもらうこともありません。従来の助成制度からみると、その名のとおり、まさに「ぶっとんだ」支援制度なのです。

2019年度から年1回実施し、これまでに3回の募集を終えました。第1回はメールの先着順で受け付けて対面で審査、第2回は1次審査を動画、2次審査を対面で行い、第3回は1次審査を動画で、2次審査はコロナ禍であったためZoomによるリモートで行いました。また、第2回より審査員が「ぶっとぶくらい心を動かされた」場合は30万円を支援しています（1件のみ）。

ぶっとびファンドは発足当初から全4回の実施と決めており、今年5月に第3回の採択を終え、2021年度内に募集する第4回を残すのみとなりました。そこで、このタイミングでぶっとびファンドの審査員4人が集まって、改めて「ぶっとびファンドとはなんぞや？」と今一度考える、振り返り座談会を行いました。本記事にて、その座談会の内容をお届けいたします。

#### 座談会実施日：2021年6月22日（火）Zoomにて

参加者（ぶっとびファンド審査員・敬称略）

大澤寅雄（ニッセイ基礎研究所芸術文化プロジェクト室主任研究員）

長津結一郎（九州大学大学院芸術工学研究院助教）

古賀桃子（NPO法人ふくおかNPOセンター代表）

古賀弥生（アートサポートふくおか代表）

---

## 投げ銭感覚の支援、そのマインド

**古賀弥** 本日は皆さんに、「ぶっとびファンド」（以下ぶっとび）のこれまでの振り返りを行っていただきます。桃子さんは所用により途中までのご参加になりますので、まずは桃子さんにご意見をうかがいたいと思います。桃子さん、「ぶっとびファンド」の審査を担当されて、これまでに気になったことはありますか？

**古賀桃** 30万円の支援枠について思うことがあります。そもそもぶっとびの支援金って投げ銭のような温かい感覚のものなのですが、この30万円枠に対しては、応援の気持ちに加え、「審査」とか「精査」の気持ちがわいてしまって。エンパワーメントするためのファンドとはいえ、30万円枠についてはマインドセットとか心構えとか視点の置き方とか難しいなど内省しました。

**古賀弥** 企画に対しての支援というよりも、次へのステップに向けて30万円を支援するという方がよかったという感覚でしょうか。

**古賀桃** 頑張っほしくもあります。ここはあえて30万円ではなく、とりあえず10万円からやってみて、成果を見せてほしいという気持ちもわきましたね。

**古賀弥** 実際に30万円を獲得した団体は、関係者一同すごく喜んでいらっしゃいましたし、私もその様子を見て嬉しく思いました。さらに後日に、「30万円をいただけたことでその次の展開も視野に入れて頑張ります」というコメントをもらいました。1回限りの活動で終わるんじゃなくて、その次も頑張ろうという気持ちになったというのは、30万円の効果があったように思います。

**古賀桃** そうですね。ですから、審査する側としての30万円に臨む心の持ちようとか、目線の持ちようが難しいなと思いました。

**大澤** 3回目の選考会で30万円を出したのは、僕の中ではよかったと思っています。今から言っても遅いかもしれないけど、例えば、報告会の場で、この報告は素晴らしかったのでぜひこれからも頑張ってもらいたいという活動に20万円とか、10万円を支援するという報奨的な考え方もあるかなとも思いました。活動によって生まれたものに対して素晴らしかったねっていうだけじゃなくて、当初は予期していなかった成果や波及効果に対する事後評価によって、その活動の継続を支援する助成金があってもいいのかなという気がしました。

**長津** 30万円については、桃子さんがおっしゃるとおりで、審査マインドなのか投げ銭マインドなのかってところかというと、投げ銭マインドと言うには、合議で決めるということと、高額であるところが、やはりちょっと難しいなと率直に感じます。大澤さんが今おっしゃったアフターで投げ銭にするという考え方は、そういう意味でもチャレンジングで面白いなと思います。

**古賀弥** わかりました。この件はもう少し考えましょうね。大澤さんと長津さんから桃子さんに訊いておきたいことはありますか？

**大澤** 桃子さんが文化芸術分野以外の立場からみて、気になることってありますか？ まちづくりや生涯学習などの支援制度に比べると、「こういうところがぶっとびならではのぶっとんでいるところだなあ」みたいな。

**古賀桃** いまは自立性を求める傾向が強くありますが、基本的にはアーティストを応援するという側面がぶっとびは強いですね。最近では、よく地域との連携とかコミュニティへの浸透とか、何人集めたかとか、メディアにいくつ紹介されたかみたいところを求める傾向が他の助成制度からは強く感じますが、それと比較するとやっぱりぶっとびは投げ銭感覚が強いと思います。また、エンパワーメントできるかというところはやはり気になるので、その目線で制度設計のあり方は引き続き考えたいなって思います。

**大澤** その「自立」ということについてですが、私もどうとらえればいいのかっていうのを、コロナ禍という分岐点があってまた考えなきゃなって思っているところです。

**古賀桃** 教科書的には「財源の自立」とか唱えられがちですが、なかなかそううまくいきません。逆に当事者がすごく自立的に活動しているパターン……他者にはいろいろな制度で世話になりながらもマインドは自立するみたいなことがあったりもして、難しいですよ。そのとらえ方だったり測り方だったり。

**古賀弥** ここで桃子さんはお時間のため、退場です。桃子さん、ありがとうございました。大澤さんと長津さんは引き続きお付き合いください。

## お金だけじゃない依存先。ネットワークの構築を

**古賀弥** 自立という話が出ましたが、自立しようがない部分での支援をどうしても必要とするのがアートの特徴だともいえます。そういう意味では、投げ銭でも助成でも協賛でも何でもいいんですが、何かないとやっていけない世界だというのが大前提かなと私は思っていて、そこはほかの領域とは確かに違うでしょうね。

**大澤** 医師・科学者の熊谷晋一郎さんが、自立とは依存の反対ではなく、依存先が数多くあることが自立だと言っていて、僕はすごく共感するんですよ。ですから基本的には僕もたくさんさんの依存先の一つにぶっとびがあればいいなと思うんですが、実際のところ、いろいろなところに依存するという動き方をするとところは少ないなあと感じます。結果的に助成金が取れたらやるけれども取れなかったら出来ないっていう活動の方が多くなっているんじゃないかなと。どうすれば依存先を増やすことが出来るんだろうか。ぶっとびはその依存先の一つになりえています。でも時限的なものですし。それにぶっとびに申請してきた人たちのどれくらいが、ほかからも支援を受けられているのかといたら、まあやっぱり難しいんじゃないかなという気もしていて、そこがちょっと悩ましくあります。

**古賀弥** もともとぶっとびを始めたのは、それまでの助成制度への不満だったわけですから、結局、それで助成制度はどうなのよってブーメランのように戻ってくるんだなというのは私も思いますね。ただそういう話もありつつ、自分が想定していたよりも応募してくださる方たちの広がり具合が、特にこの前の3回目ではすごく広がってきたなという気がしています。「アートで人とまちをしあわせにする活動を応援する」って言いながら、それは一体どういうことなのかというのを1回目ではなかなか説明できませんでしたが、2回、3回と回を重ねるにしたがってその内容が割とクリアに見えるようになってきたなというのを私は個人的に感じているところです。

**長津** 自立の話で思ったことがあります。やっぱりこういう小規模な助成金制度の原点には、アサヒ・アート・フェスティバルがあるだろうと思っています。アサヒ・アート・フェスティバルの支援金も、確か30万円でした。そんなに額は大きくないけど、その代わりにネットワークを作り、全国の小規模なアートプロジェクトやアーティストの横のつながりを作ることが目指されて始まったように認識しています。ぶっとびでも、過去3回関わらせてもらった中で、ネットワークが広がればいいなって思う局面はこれまでもありましたし、実際に「劇団AFRICA」と「福岡ろう劇団博多」がコラボレーションする動きや、ほかにも活動にはなっていないけれども草の根的にネットワークがつながっているところも出てきていて、これからどんどん何かが起こっていくといいなって思います。そして、それこそが「依存先」なんじゃないかなって思うんです。金銭的な依存先はもちろん増えた方がいいし、また複数増えた方がいいと思うんですけども、僕はやっぱり重要なのは居場所があるかということだと思います。

**大澤** 全くそうですね。必ずしも金銭的な依存だけじゃなく、ネットワークっていうのが依

存先であるという。ですから今回の「劇団 AFRICA」と「福岡ろう劇団博多」がお互い稽古場がないという話から発展してコラボレーションするというのは、すごくよいケースで、すごく素敵だなと思います。

**古賀弥** この二つの劇団はぶっとびよりも以前に共演経験はあるので、ぶっとびで出会ったわけではないのですが、ご縁がつながるきっかけにはなったかもしれませんね。また、ほかにもぶっとびで名刺交換したことからお互いに活動を観に行ったりというつながりも出来ているようです。

**大澤** お互い応援しようとか、あるいは勉強しようとか、ネタを探しに観に行こうでも、何かきっかけをつかみに行こうでもいい。そうやって確実にネットワークが生まれているし、徐々にお金だけじゃない依存先を獲得していくことだなと思います。

## アートサポートふくおかの、20年間の蓄積の現れ

**長津** 「アートサポートふくおか」がこれまでやってきたまちづくりのゼミがありますよね。そこで人が集まってまちづくりであるとか、アートマネジメントのことを勉強し合うとか語り合うような、そういう場を開いてきたというようなことも、おそらく今のぶっとびでのネットワークの作られ方にすごくつながってきている部分があるんだろうな、と感じます。福岡では近い領域の人との出会いはよくありますが、アートマネジメントというやや曖昧な分野では、その領域を横断して出会える場とか、いまやっているあの人の作品を見に行こうよみたいなことが言い合える場がなかなか少ないなと感じています。そんななかで、ぶっとびで起こっているコミュニティについては、将来的には横につながっていくような動きになっていくんだろうなって考えていて。つまり、アートサポートふくおかがあることで今のぶっとびのようなつながりも生まれているんだなと歴史を感じました。

**古賀弥** なんていいコメント！（笑）ありがとうございます。

**大澤** 実際そうですよ。アートサポートふくおかって今年年でしたっけ？

**古賀弥** 20年目です。

**大澤** 20年ですか。その厚みを感じますよね。福岡のアートマネジメントを本当に支えてきた団体だなと思うし、そうやって蓄積したものがふだんは目に見える形で出てくるわけではないけど、このぶっとびが1回目、2回目、3回目と重ねるにつれ、どんどん形に見えてくるものがあるのは、それ以前のアートサポートふくおかの20年間の蓄積の現れという気がします。

**古賀弥** ありがとうございます。アートサポートふくおかもいつかやめる時が来るんですが、誰かに後を継いで続けてもらいたいという気持ちが私には全然なくて。たとえば、子どもや高齢者の芸術体験とか、いろいろやっていることが部分的に何かの形でつながっていて、それが続いていったらいいなって感覚なんです。文化施設とか行政とか財団とかい

ろんなところもやってるので、ほかがやってくれるなら私がやらなくてもいいかなとも思っています。

ぶっとびではさまざまな分野で独自に育ちあがって来られた方々とのつながりができましたが、たんぼぼの綿毛が一気に飛んで根づくように、アートサポートふくおかのスピリットみたいなものをちょこっとずつ皆さんに分け持っていてあっちこっちに飛んでいくイメージが私の中にはあります。それを意図してぶっとびを作ったわけではありませんでしたが、結果的にそうなったのが本当によかったなと思っています。私はちょこっとしたことしか出来ていませんが、やってきたことがものすごく広がったなっていうのが、今の時点での一つの成果といえるかもしれません。

**大澤** 僕から見ているとアートサポートふくおかが、福岡というこの場所にもものすごくこだわり続けたところがすごいなと思っています。いろいろな中間支援的な活動を福岡というエリアで展開してきている。もちろん九州全体、あるいは全国も視野に向けているかもしれないけど、根付き方がいいなと。本当にたんぼぼみたいだなと思いました。踏まれても踏まれてもまた花を咲かせ、ふわふわと綿毛を飛ばすみたいなの。高い所から外に向けて発信というよりも、本当に身近な足元から作っていくっていうような印象です。つまりアートサポートふくおかが、顔の見える関係の中で支え合うということを展開してきたのが子どもや高齢者への芸術体験であり、また、このぶっとびも同じだなと感じます。

## 発芽のタイミングはそれぞれに。ぶっとびの種のまき方

**古賀弥** ぶっとびって何だろうとか、今までのところで何が生まれたかとか、生まれてないかとか、まだ途中なので今後に期待することがありましたら、最後に一言お願いします。

**大澤** 僕、ふとこの一週間ぐらい前に、ぶっとびが終わるのはもったいないなと思ったんです。それで、新聞社とかに3回までの成果をちゃんと記事にしてもらおうようお願いしたり、それを踏まえて新聞社でこういう助成制度を作りませんかという提案したりとかできないもんかなって考えたんです。でも、そうせずに4回で終わるっていうことでいいのかなっていう気もしたり。まだわかりません。

福岡はポテンシャルがある土地なのに、それを地道に蓄積して持続可能な土壤になっていない気がしています。でも一方で、ある活動をたどれば20年前にこういうことがあったなとか10年前にこういうことがあったな、あの人が遺してくれたんだなみたいなことが、たどればわかる土地でもあります。そんなつながりが何らかの形で今も生きているっていうところはよく感じるんですよ。北九州のように専門性のある大きな劇場が福岡にあるわけではないし、財団がものすごく潤沢な予算でしっかりとした体制でやってるわけでもなく、結局、「自発的な民間の活動」がつながりの中で生まれたり消えたりしながら、こういう土壤が生まれている。僕は時々それってもったいないよ、だから福岡市や財団も頑張ってくれ

よと思うんですけども、じゃあ、ぶっとびを財団でとか新聞社でっていうふうやっていくのは、福岡らしいのかどうなのかっていうのは分からない。でもそれこそ、たんぼぼの綿毛が次の花を咲かせるように、見守らないといけないし応援しなきゃいけない。お金の面ではないとしても、僕自身、応援していきたいなと思ってます。

**古賀弥** ありがとうございます。では、長津さん。

**長津** 今日話さなきゃいけないって考えてたのはすごくシンプルな話で、ぶっとびには応募書類がいらないうってやっぱりすごいなって今さらながら思ったんですよ。しかも2回目、3回目の1次審査は映像でやったわけじゃないですか。また、その映像に謎の応援コメントがついていたり、半分くらいは慣れていない映像でのプレゼンだったりして。でもなぜか分かるんです。伝えたいこと、やりたいことが分かる。僕自身はそう思いましたし、審査員4人全員で意見を突き合せたときに、もちろん凸凹はあるけど概ね一緒の結果になりました。この概ね一緒の結果になるっていうことがどういうことなんだろうなって、答えはないんですけど考えています。

そこで、我々の中で発動される判断基準とか価値基準が一緒なのであれば、もう書類は要らないってことになる、要らなくていいなって思ったんです。このぶっとびという実験に関わらせてもらって、普通の助成金の申請をしようとする、何のために応募書類とかで活動の概要2000字とか書かなきゃいけないんだろうかと思ってしまいます。もしかしたら読めないんじゃないか、熱意をこめて書いても事務的なチェックにしか使われないんじゃないか、と思ったりして、もやもやしています。たとえば、次に大澤さんや私が助成金を支援するような仕事に関わることがあるとしたら、もう申請書とかやめた方がいいよって絶対言ってしまうのではないかと思います。そういう意味で、ぶっとびファンドは原初的体験になったかもしれません。

「何か分かんないけどとりあえず一緒にやってみようよ、サポートするからさ」って、すごくアートマネジメント的だしパトロンの、いい実験だったと感じています。ちゃんと花が咲くところまで、ああだこうだ言いながら企画の種をまき、育てていけるようなプラットフォームが、これからも続いていくといいなっていうふうに思います。

**大澤** 『雑草はなぜそこに生えているのか』（稲垣栄洋 著、筑摩書房）という大好きな本があります。その本には、野菜や草花の販売されている種子はその時期に植えればちゃんと何週間後に芽が生えてくるけど、いわゆる雑草は、種はあるものの芽を出すタイミングって本当にまちまちなんだっていう話が載っていて。それこそぶっとびは、そういう種のまき方をしているような気がします。年度末までに花を咲かせて収穫してねっていう助成金じゃなくて、いつ種が発芽してもいいですよみたいな、そういう実験的なファンドですよ。ですから、ぶっとびから飛んだ種がこの先どんな福岡の文化の生態系や循環を生むのかっていうことを、僕ら自身も観察し続けたいなっていう気はします。

## **Information**

ふっとびファンド第4回の募集は、2021年12月に予定しています。

詳細は、アートサポートふくおかのウェブサイトにて随時お知らせいたします。